男女共同参画社会に関する市民意識調査の結果から

にいつ女男はイキイキしてるかナ？

「戦後、強くなったのは女と靴下」などと言われたことがありました。確かに、戦前に比べ女性の地位は向上したように見えます。しかし、女性は本当に一人の人間として力を発揮できるようになったのでしょうか。

今号では、これからの男女が共により良く生きる社会について考えながら、今年七月から八月に実施した市民意識調査の結果の概要をお知らせします。

男女平等の現状は？

二十世紀後半になって女性が社会のさまざまな分野で活躍する姿が見られるようになりました。今や法律や制度上では男女平等がほぼ実現されるようになってきました。

しかし、現実には「どうして女性ばかりが家事や育児、介護をするの？」「政策・方針などを決める場に加わりたい」「私たちだって外へ出て働きたい…」そんな女性たちの声が聞こえてくるようです。やはり男女平等ではないのでしょうか。

男と女は違うものでも、同じ人間

男女平等というと「平等っていうけど、男と女は違うものでしょう」と言う人がいます。

その通りです。確かに、生物学的にオスである男性とメスである女性は根本的に違うものです。この違いをセックス（sex・性差）といいます。

これに対し、「女性は男性よりもおとなしくするもの」というような男女の違いは、持って生まれたものではなく、歴史や風土の中で築かれ、日常生活の中で「当たり前のこと」として周囲から学んだり身につけさせられたものです。これを社会学的にジェンダー（gender・性差）といいます。我々は無意識のうちに、男女についての多くのことをジェンダーとして区別していますが、一人の人間としては、これらのものによって区別されるべきものではないのです。

作られた性差（ジェンダー）が女性の活躍を阻む

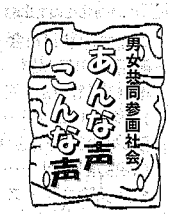
私たちに無意識に植え付けられたジェンダーの意識は「男は外で仕事をし、女は家事と子育てをする」「女は家にいるもの」に代表されるような男女間における固定的な役割分担などの価値観をつくり出しました。それが「当たり前」だったからです。

この価値観から来る有形無形の圧力が、さまざまな行動を制限しています。

女性が一人の人間として、持っている個性や能力を伸ばしていきいきと生きる機会や自由が、これらの価値観に奪われているとしたら残念なことです。

これからは男女共同参画社会

男女平等と言われながらも、今なお、固定的な役割分担に見られるような男女間の不平等が存在しています。



眞島貫代子さん（下興野町）

男女共同参画社会は、生まれ持った性差をお互いに尊重しつつも、男だから女だからと決めつけるのではなく、個人の能力や価値観で自分らしい生き方を選び、責任を持ってやり遂げていくという、新しい時代の到来と受け止めています。

女性も男性も、家庭の在り方を問い直すことから始め、地域のネットワークに積極的に参加しながら、あらゆる場所で男女のパートナーシップを実現していけたら、さらに豊かでバランスのとれた社会になるのではないかと思っています。

男女共同参画社会に関する市民意識調査の結果から

確かに、生物学的には男女平等とはいかない面がありますが、一人の人間としては平等であるべきです。

そのために、今までは「当たり前」とされてきたことを見直し、男性・女性がそれぞれ一人の人間として尊重され、自らの選択によって生き生きと活躍でき、お互い喜びと責任を対等に分かち合えるような家庭や社会、つまり男女共同参画社会をつくり上げることが必要です。

しかし、男女共同参画社会は、単に共働きを推奨したり、専業主婦を否定したりするものではありません。そういった役割を強制されるのではなく、協議のうえ、自ら選び、責任を持って行うならば、それも男女共同参画と言えるのです。

男女共同参画社会その実現のために

今年六月、男女共同参画社会基本法が制定されました。

これは、男女が対等な立場で責任を担う社会の実現を総合的にそして計画的に進めるための法律です。また、育児・介護休業法や男女雇用機会均等法、労働基準法もこれに合わせて改正されました。つまり、法律・制度面では男女共同参画社会実現のための足場はできているのです。

次は、私たち一人ひとりが家庭や職場、学校、地域社会などで性別にとらわれず一人の人間として尊重し合い、男女共同参画社会づくりを実践する番です。あなたも「当たり前」と思っていることを見つめ直してみませんか？

家庭で
男女がお互いを思いやり、家事や育児・介護などを分担する意識が必要です。

職場で
大切な意思決定の場面に男女の知恵を活かすようにしましょう。

学校で
「男の子らしく」「女の子らしく」に代えて「その子らしい」個性を伸ばします。

地域で
ボランティアや地域づくりに参加できる機会を増やしましょう。

それでは新津市の現状を見てみましょう――調査結果

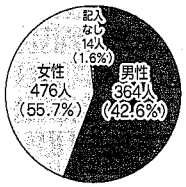
今回の調査は、八百五十四人の方から回答をいただきました。調査の概要については下記のとおりです。

大まかにみると、女性よりも男性の方が、若い人よりも高齢者の方が、従来からの男女の価値観を持っている傾向にあります。いわば強いジェンダーを通して物事を見ているようです。

男女共同参画社会に、一般論的には賛成していても、各家庭の現実は違うようです。

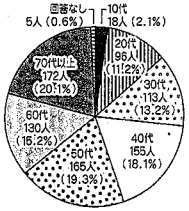
男女共同参画社会に関する市民意識調査

- 調査期間　平成11年7月1日～8月7日
- 調査対象　2,000人（無作為抽出した18歳以上の市民）
- 調査方法　郵送法
- 回収件数　854件
- 回収率　42.7%



回答者の男女別と年代別の比率は左のグラフのとおりです。

ここに挙げた以外の分類では、配偶者のいる人が六百十五人（七二・〇%）、三世代同居をしている人が二百七十八人（三二・六%）となっています。



※グラフの数値は、少数第2位を四捨五入したため、合計が100%にならないことがあります。

木原四郎さん（下興野町）

以前は私が会社勤めをし、妻が家事をしていましたが、私が会社を辞め、独立開業したのをきっかけに、私が家で仕事とできる範囲の家事をし、妻が会社勤めをしています。

男の私が家事をすることについて、家族が幸せに毎日の生活を送るためには「男のプライド」とか「二近所の手前…」というようなことを気にするということはありませんでした。ただ、家族の中で「やれる人がやる」というように分担しているに過ぎません。

介護される人が増えるこれからの時代は、そういった意識も大切になるのではないでしょうか。